

## 低用量ミルタザピンが健常者の運転技能に与える影響

### Effects of low-dose mirtazapine on driving performance in healthy volunteers

岩本 邦弘<sup>1</sup>、河野 直子<sup>1</sup>、笹田 和見<sup>1</sup>、幸村 州洋<sup>1</sup>、山本真江里<sup>1</sup>、江部 和俊<sup>2</sup>、野田 幸裕<sup>3</sup>、尾崎 紀夫<sup>1</sup>

1 名古屋大学大学院医学系研究科精神医学分野

2 豊田中央研究所

3 名城大学大学院薬学研究科病態解析学 I

[Human Psychopharmacology: Clinical and Experimental 2013, 28, 5, 523-528]

【目的】ミルタザピン(MIR)は高い有効性を示す抗うつ薬であることがメタ解析で確認されているが、その耐用性が臨床上問題となり、最もよく報告される副作用は傾眠である。一方、過鎮静や傾眠は、抗うつ薬治療中のうつ病患者において、運転技能に影響を及ぼす重要な要因であると考えられている。そこで、本研究の目的は、初期の低用量 MIR が、運転技能への悪影響を軽減するか否かを確認することである。

【対象と方法】被験者は日常的に運転を行う健常男性 13 名(年齢幅:32~49 歳、39.2 ± 6.2 歳)で、問診や精神科診断面接により身体・精神疾患を有さないことを確認した。本研究は名古屋大学医学部生命倫理審査委員会の承認事項に則り、被験者全員から書面による同意を得て行われた。MIR7.5mg、MIR15mg 及びプラセボ(PCB)を 8 日間連続で眠前投与する、二重盲検クロスオーバー試験法を行った。服用前、2 日後、9 日後で運転技能・認知機能・Stanford 眠気尺度(SSS)を評価し、試験終了後に副作用を確認した。運転課題はドライビングシュミレータを用いた追従課題(車間距離の維持)、車線維持課題(横方向の揺れ)、飛び出し課題(ブレーキ反応時間)を行い、認知課題は Continuous Performance Test を行った。MIR7.5mg 投与群では、さらに 9 日目に MIR15mg を投与し、投与 10 日目にも同様の評価を行った。結果は反復測定二元配置分散分析を行い、5%未満を有意差とした。

【結果】車線維持課題において、2 日後の MIR15mg 群は MIR7.5mg 群および PCB 群と比較して有意に成績が低下した。SSS では 2 日後の MIR7.5mg および MIR15mg 群は、PCB 群と比べ有意に増加した。これらの指標は 9 日後では 3 群間で有意差はなくなった。10 日目における、MIR7.5mg から 15mg への増量では、増量前の 9 日目と比較し、いかなる課題に関しても統計学的有意な影響は認めなかった。

【結論】MIR7.5mg と MIR15mg はともに主観的な眠気を増加させたが、MIR7.5mg は MIR15mg と比較し、運転技能の低下を惹起しなかった。低用量 MIR を開始用量とすることで、運転技能への悪影響を低減し、耐用性が向上する可能性が示唆された。